

ケープペンギンにおける炎症反応の指標としてのフィブリノーゲンの有用性の検討

近藤圭佑

(マリンワールド海の中道)

鳥類の血液検査において、炎症反応の指標としては主に白血球数の算定が用いられるが、用手による算定であるため誤差が生じやすいというデメリットがある。そこで、機械的な数値測定としてフィブリノーゲンの数値が炎症反応の指標として有用かどうか、過去の血液検査データを用いて回顧的に検討を行った。

2024年9月から2025年11月までのケープペンギン (*Spheniscus demersus*) の血液検査データ (n=81) を疾患群 (n=21) と非疾患群 (n=60) に分け、ROC 曲線を作成してフィブリノーゲンのカットオフ値を検討した。その結果、フィブリノーゲンは疾患の有無の鑑別に有用であり、カットオフ値を 80mg/dl とすると良いことが分かった。また、疾患個体の数値の推移を検討すると、急性期には病態とフィブリノーゲンの数値に関連性があるように思われたが、慢性期に移行後は病態との関連性が薄れるような印象があった。

今後もデータを集積し、さらなる精度の向上を目指すとともに、病態の時期との相関性についても検討していきたい。